

<翻 訳>

トーマス・ムルナー『ルター派の大阿呆』(2)

名古屋初期新高ドイツ語研究会訳

(代表 丑田弘忍)

はじめに

ここに翻訳したのは、1522年に刊行されたトーマス・ムルナー『ルター派の大阿呆』(Thomas Murner: Von dem grossen Lutherischen Narren) 第9章から第26章までである(第8章までは『中京大学教養論叢』第45巻第4号に所載)。底本としては、Franz Schultz編集のムルナー著作集 Thomas Murners Schriften mit den Holzschnitten der Erstdrucke の第9巻(Paul Merker編, Karl J. Trübner社1918年)を使用し、適宜 Joseph Kürschner: Deutsche National-Litteratur Historisch-kritische Ausgabe 第17巻第2分冊(G. Balke編 三修社版1973年)を参照した。聖書に関しては『聖書 新共同訳』(日本聖書協会1987年版)に拠った。

この翻訳は、研究会のメンバーが月一回の研究会の都度各章を分担して訳し、共同で検討したものを、本論叢に掲載する際、再度検討修正したものである。但し、解釈の一致をみない箇所についてはその章の担当者に最終判断を任せた。2006年1月現在のメンバーは青木一行(名工大名誉教授), 丑田弘忍(中京大助教授), 工藤康弘(関西大教授), 精園修三(中京大元教授), 橋本忠欣(福井大名誉教授), 松尾誠之(愛知県大教授), 森昌弘(中京大元教授・名大名誉教授), 山田やす子(皇學館大教授)(以上アイウエオ順)の8名で、今回の各章の担当者は次の通りである。

第九章 精園
第十章 精園
第十一章 橋本
第十二章 松尾
第十三章 松尾
第十四章 森
第十五章 森
第十六章 山田
第十七章 山田

第十八章 青木
第十九章 青木
第二十章 丑田
第二十一章 丑田
第二十二章 工藤
第二十三章 工藤
第二十四章 精園
第二十五章 精園
第二十六章 橋本

第九章⁽¹⁾ どんな小阿呆どもが大阿呆の腹の中に居座っているかということ

私はどでかい小阿呆どもを孕^{はら}んでいる。

願わくは奴らが晒^{さら}し台に引っ立てられるか、
海の底に沈められ、
私との縁が切れればいいのだが。

775 おお兄弟⁽²⁾よ、私の腹の中に何がいてこんなに膨らんでいるか、
ご存知あるまい。

小阿呆どもが大勢そこに居座っていて、
動こうとしないのを知れば、
お前は仰天するだろう。

780 ああ、もし奴らを追い出してくれれば、
恩に着るのだが。
長期間奴らを居座らせるわけにはいかん。
お前が奴らを
祓^{はら}い出す方法を考え出してくれるものと

785 期待しているんだ。
もうこれ以上奴らを養うのは御免だ。
お前は大変きつく祓^{はら}ってくれたので、
小阿呆どもの秘密を打ち明ける気になった。
奴らは全部で十五人で、

790 その一人一人に名前はない。
でっぷり太ったどでかい奴らで、
十五人の同盟者⁽³⁾と呼ばれている。
奴らの一人一人が、どうしたら世の中万事具合が良くなるかと、
それぞれに文句を並べている。

795 奴らは聖職にかかわる
あらゆることを手中に収め、

その内情を事細かに調査し、
 改善につながるもので、
 自分たちの目的にあうものを、
 800 決して見落とさなかった。
 十五人の同盟者はそのすべて、すなわち大阿呆の演技方を、
 箇条書きにしてみせたが、
 それはいかがわしいもくろみだ、と言わざるを得ない、
 もちろん風呂屋で交わされる素人政談たぐいの。

注

- (1) この章は大阿呆の視点で語られている。文中の「私」は大阿呆である。
- (2) 大阿呆が阿呆祓い師に呼びかけている。
- (3) 「十五人の同盟者」とはヨハン・エーバリーン・フォン・ギュンツブルク Johann Eberlin von Günzburg (～ca. 1530) が出版したパンフレットのタイトル。彼は元フランシスコ派の修道士、後にプロテスタント派の巡回教師になった。このパンフは当初ばらばらに印刷されたのを一冊にまとめたもので、その中で著者は十五人の同盟者にそれぞれ宗教界の制度、慣習について改革を提案させている。

第十章⁽¹⁾ どうすれば同腹の仲間⁽²⁾が祓われることなく自ら進んで出たがるかということ⁽²⁾

805 「おお兄弟⁽³⁾よ、あの方々^{かたがた}を祓うなんて、
 金輪際^{こんりんざい}出来ない。」
 「呪文をただ一言口^{ひとこと}にすればいいのだ。
 連中を少々痛い目にあわせる呪文を。」
 「そんなことをするくらいなら舌を嚙んで死んだほうがまだ、
 810 私があの方々に楯突いて、
 反抗するなんて。
 あの方々は皆情け深い旦那方で、
 私を思いもよらぬ地位に

引き上げて下さった。

815 あの方々のお力添えで

教皇様は私を太鼓持ちに

取り立ててくださったのだ。その職につけたのは

あの方々が力を合わせて助けて下さったおかげだ。

恩知らずにはなりたくない、

820 世話になった旦那方を祓い、

^{なにがし}何某かの苦痛を与えて、

外へ祓い出すなんて。

あの方々は別の方法で連れ出したい、

歌と楽器でだ、

825 上手に歌ってあの方々が

自ら進んで出てくるようにしたい。

私の声の音色はそれほど^{かんび}甘美なのだ。

祓って出すには及ばない。

あの方々は阿呆の私が演奏するのを聞くや否や、

830 絶対に中でじっとしてられないのだ、

たとえ鎖につながれていてもだ。

本当にみんな阿呆な方々だ。」

注

- (1) この章の冒頭の引用文と第三の引用文は阿呆祓い師、第二の引用文は大阿呆の言葉である。
- (2) 原語は buchgenossen (=Bauchgenossen) で、Bauch「腹」と Genossen「仲間」の複合名詞で、大阿呆の腹の中に居座っている小阿呆どものこと。同時に前章の「十五人の同盟者」の Bundgenossen「同盟者」と掛詞になっている。
- (3) 阿呆祓い師が大阿呆に呼びかけている。なお、阿呆祓い師の以後の言葉の多くは皮肉である。

第十一章⁽¹⁾ 一番目の同盟者

悪しきキリスト教徒に惑わされないようにとの
キリスト教界の皇帝カール⁽²⁾に対する苦言⁽³⁾

今ここにおります私は太鼓持ちの名手で、

かつてあなた様をお見捨てしたことはございません。

835 それなら私は今何を新しくしようというのでしょうか。

私は阿呆に組みすることをなんら恥じるものではありません、

昔はもっと阿呆なことをしてきたからです。

誰かが阿呆を引き渡さなければならなくて、

差し出された私を当の相手が

840 ふさわしくないと突っ返すようなら、

そいつは大損することになるというものです。

だって私は全ての阿呆を祓う⁽⁴⁾ということなくとも

阿呆の立場を守りたく、

誰が馬鹿にするか存じませんが、

845 当然阿呆の立場を変えるものではありません。

阿呆祓いを依頼される前に

大変心配になって助言申し上げます。

不注意にもテルトゥシアン⁽⁵⁾しか

配慮いただけなかったことは

850 大いに不快なことです。

牧童さえ教えられないテルトゥシアンが、

われわれの皇帝に教師として押し付けられ、

学識豊かな生き方を教えたのです。

教会と修道院を壊すためには、

855 テルトゥシアンは聖書に不案内で、

全てをひっくりかえそうにも、

地獄へ落ちろ、とばかり
山積みして捨ててしまおうにも
福音の何たるかも知らないのです。

860 陛下のもとで托鉢坊主が
地位を得て
陛下がこの男に懺悔することになれば、
自分が祓われる以上にひどく
耳が痛みます。

865 皇帝が別の懺悔僧
学のあるカールシュタット⁽⁶⁾をお抱えくださるとあれば、
私の最上の牝牛を献上いたしましょう。
この男は陛下にこんなことを書くことができるのです。
聖水には悪魔を追い出す

870 効力がある、とか、
司祭は妻を娶るべきである、とか、
一般の考えとは異なることを、です。
更に聖水は陛下に役立ちます。
ぶどう酒の持ち合わせがないときには
875 聖水をお飲みになれます、
聖水で洗えば目がよく見えるようになります。
私たち全員だまされていたのですから、
当然カールシュタットが取り立てられるべきです、
この者が来るまでは、

880 どの坊主も聖水を与える権限がなかったら
私たちに聖水を出すことはかなわなかったのです。
カールシュタットは聖水をつくる正しいコツ⁽⁷⁾を
始めて会得したのです。
ですから陛下はこの男を側に

885 お置きください。
陛下が馬にお乗りになれば、この男も馬で従います。

陛下に当然していただくべきことなのですが、
私に従い下さるのなら
陛下にうまくラテン語を話せる人を
890 ご紹介したく、
その者⁽⁸⁾は間違いなく
学識深いよき教師になりましょう。
修道院や教会、
さらに中剃りの若僧どもと一緒に
895 茶蕪の中で煮るべき仕方を
ルターはラテン語聖書で見つけてくれます。
後ろが尖った僧帽を被った
いたるところほっつき歩いている
托鉢坊主たちは、
900 太って元気がいいので
他にベーコンなどは入れません。
陛下が私たちの味方になってくだされば
私は陛下の栄誉を大いに称え、
がらくたをまとめて、私たちが炎の中へ、
905 火の中に投げ込んでみせます。
私はこんなことを陛下に十分進言いたしました。
陛下がそうしてくださったら、豚を一頭焼いて献上いたします、
その上飲み物も追加してもよろしい。
他の者たちに頼まれる前に私は陛下にこう進言いたしました。

注

- (1) この章(第十一章)から第二十五章までは、大阿呆のお腹の中に居座っていた十五人の小阿呆どもが登場し、主人公としてそれぞれ一章ずつ語ることになる。第九章注(3)参照。これらの章において時にムルナーが顔を出すこともある。
- (2) カール5世(1500-58)のこと。神聖ローマ皇帝、在位1519-56年。皇帝マクシミリアン1世の孫。父が早世したことから、1516年にはスペインの王位

を継ぎ、さらに1519年、マクシミリアンの没後おこなわれた皇帝選挙で神聖ローマ皇帝(在位1519-56年)に選ばれる。このころドイツではルターの宗教改革運動が進行しており、カールはカトリック的な理念からこの改革運動の抑圧をはかった。

- (3) エーバリーンの書いたパンフレットの副題を下敷きにしたもの。
- (4) 語り手は自ら阿呆と称しながら、阿呆祓いを買って出ている。阿呆が阿呆祓いをするというモチーフは、ムルナーが『阿呆祓い』(Die Narrenbeschwörung, 1512年)で大々的に展開しているもので、たんまり阿呆をして、阿呆に精通した阿呆こそ阿呆を祓う資格と能力があるという論法である。
- (5) 1459年ユトレヒト生まれ。後の教皇ハドリアン6世。マクシミリアン皇帝から孫、後の皇帝カール5世の教育係りに招聘された。1515年スペインのトルトサの司教、1522年1月教皇に選ばれ、翌1523年没した。彼はカトリック改革に努力したが、枢機卿たちの抵抗で挫折した。彼の文学や芸術に対する批判的な態度は人文主義的芸術愛好者の間では野蛮な教皇と言われた。
- (6) フランケンはカールシュタット出身のアンドレアス・ボーデンシュタイン。ヴィッテンベルクの説教師、伝道師としてスコラ哲学教師としてはじめはルターの教義に反対した。しかし1517年から熱狂的に新教に改宗し、ルターよりも急進的で、スコラ哲学とも決別した。この章では新教の旗手の扱いを受けているが、彼はヴィッテンベルクの宗教改革運動の過激なリーダーとしてルターとは和解することもあったが、基本的には対立した。晩年をスイスで過ごし、バーゼルの神学教授として1541年ペストで死んだ。
- (7) 聖水もただの水に過ぎないこと。
- (8) ルターのこと。

第十二章 二番目の同盟者

復活祭前四十日間の断食期間中

いかにキリスト教徒が^{ひど}酷く苦しめられるか

910 我々の踊りのためにバイオリンを弾いてくれるというのなら

私も踊りの輪の中に入りたい。

というのも自分にはとりかかった仕事がある。

それが実現すれば

私は立派にひと仕事やり遂げたことになるし

- 915 さらに全ての阿呆から報酬がもらえる。
断食なるものは廃止することにしたいのだ。
うちのかawaii老いぼれ馬もこれが原因でくたばった。
これについては知っていることが色々ある。
馬に餌をやらす
- 920 かawaiiそうに厳しく断食させ
空の飼い葉桶をなめさせるようなことをすれば
体がやせ細って衰弱し
肋骨が一本一本数えられる程だ。
家畜ですらそれで死ぬことが多いのに
- 925 人間がやせ衰えないなどということがあろうか。
断食は撤廃せねばならぬ。
鉄のごとき牛ですらそれで死にかねない。
だから長期間の断食で生身の人間が
死んであの世行きにならないことがあろうか。
- 930 断食は数々の苦痛をもたらし
キリスト教徒を大いに苦しめている。
今、復活祭の卵の上にしゃがんであたためている
妊娠した農夫⁽¹⁾がたくさんいる。
連中に断食をするよう命じたとして
- 935 どうせ卵を^{かえ}孵すことなどできぬであろう。
我々が若い雌鶏を復活祭のために
納屋の^{たたき}三和土で飼っているのは何のためだ。
我々が何か口に入れたいとき
腹がぐうぐう鳴るとき
- 940 なぜ教皇にそのことで尋ねる必要があるのか⁽²⁾。
そしてわざわざそのためにローマまで出かけて行って
卵やバターやチーズを買い込まなくてはならぬのか。
そこから戻ってくる前に
我々は空腹で死んでしまうことだろう。

945 なぜ狼はあのローマへ行かぬのか。

あいつは羊の群から一匹を

あるいは鶏小屋の鶏を食ったりして

断食の期間といえどあれ程の肉をむさぼっているではないか。

狼には敬虔なキリスト教徒よりも

950 多くの勝手が許されるというのか。

全くもって合点^{がてん}がゆかぬ。

教皇は^{あらかし}予め狼どもに肉食せぬよう命じておくべきだ。

狼どもが一点一画もおろそかにせずそれを守るなら

神の命ずるところを良しとして

955 我々も断食を守ろう。

私が牛乳にチーズや卵

^{きじ}雉, ^{うずら}山鶉, ^{さぎ}鷺

を、それが集まる所で買うとなれば

肉市場へ出かけて行って

960 自分で農婦から買うまでで

わざわざそのためにローマに行ったりなどしない。

大の男はそんなことでローマへ行ったりせず

肉市場で買ってしまうものだ。

だから私は誠意をもって忠告する。

965 以前断食をしたことのある者は

俺の側につけ。

断食なんぞ糞くらえ。

悪魔でさえもかつてそれで死んだのだ。

注

- (1) この「妊娠した農夫」はハンス・ザックスの謝肉祭劇(邦訳あり)にも登場する。但しそこでは村人から妊娠したと思いこまされる愚か者である。ここの関連は不明。
- (2) 断食とは言っても食べていけないのは卵や肉である。四旬節の間にこれを食べるためには教皇の特免(Dispens)を得なければならない。ヴィクラム『道

中よもやま話』第四九話（邦訳あり）参照。

第十三章 三番目の同盟者

全てのキリスト教徒が修道女を哀れむように、との要請

私はこの場のよい飾りとなり

970 この阿呆の輪舞をする三番目の男だ。

お前たちを祝福してやる必要はなかろうが

全ての修道女のために私自身がここにいるのだ。

というのはあっちこちで男と交尾^{つる}むことは

乙女の身でいることとは相容れぬのだから。

975 なぜ修道女たちは豚小屋の豚の如く

囚われの身でなくてはならぬのか。

自身の脂がありながらそのように朽ちていかなくなくてはならぬのか。

女にしてやる方がずっと良いのではなかろうか。

なぜあのように閉じ込めておく必要があるのか。

980 女にされたがっているというのに。

こういう手合いは自分の楽しみを求め

奥の院へ参詣^{さんけい}に来てくれるのを待ち焦がれている。

羊飼いに次のように言った

狼の忠告に私は従う。

985 「おやおや羊飼いの旦那、何故また

かわいそうに羊たちを穴蔵みたいな

狭い小屋に押し込めて飼ってるんですか。

そんなことをすると羊たちは皆コチコチになってしまいますよ。

元気を失わないよう

990 気ままに散歩させておやりなさい。

自分のために言っているのではありません。

かわいそうな羊のためにお願いしているんです。」

同じようなことだが、修道院に閉じ込められている
衰れな子供たちのことが不憫^{ふびん}でならぬ。

995 ぜひとも世に出して

一緒にかわいい子供を作る
似合いの相手が見つけられぬか
世間を見せてやるべきだ。

ぜひとも賑^{にぎ}やかに楽しませてやるべきで

1000 体の下から仕込みをして腹ぼてになるのもよかろうし
湯の町気分^ににひたらせてやるべきだ。

さもなきゃ子宮が凍えちまう。
ああ神よ、我等が骨肉の同胞である
衰れな子らを解き放ち給え。

1005 これら全てのことは修道女のために述べているのだ。

そうでなければ、皆が不健全な生活を送ろうと
少しも気にかかることなどなかったろう。
元気な生きのいい若者と
娑婆で十二分に騒いだ後で

1010 以前と同じく修道院へ

戻ることを許しても良いのだ。
娑婆に疲れた後ならば
はるかに良く規律の中で神に仕えることができるから。
自由に選ばせてやり

1015 全て強制してはならぬ。

前に聞いたところでは
自由な選択を望む者に対して
ニュルンベルク^①では、その者に下心があろうとなかろうと
したいようにさせている、ということだ。

1020 同様に修道女であっても洗礼において

キリスト教上の自由を与えられているのだ。
それなのに何故あのように強制的に

修道院の中で歌わせようとするのだろうか。

このような理由から三番目の同盟者である私は

1025 修道女のために大いに訴える。

修道女にこの喜びを与えること

しかも逡巡せず、直ちに実行せよ、と言いたい。

注

- (1) 編者 Merker の注によれば、これは一部の学者の言うような宗教改革とは関係がなく、それ以前の 1514 年の詩に「ニュルンベルクだったらお前も選ばせてもらえるのに」という例がある。これは判決が死刑となり、その死に方についてはその男に選ばせることになったとき、その男は老衰または病気による死を選んだという笑話があり、これがニュルンベルクであった話とされていることに基づいているという。

第十四章 四番目の同盟者

修道士や司祭、修道女などの聖職者が聖務日課⁽¹⁾と呼ぶ、
長い不愉快な叫び声のこと

私がここで仲間に加わろう、

寝過ごして、

1030 何一つ祈ろうとしないこの仲間。

私は司祭たちの長い祈りを問題にするが、

これは教皇が命じたもので、

魔の時間と呼ばれ、

沢山の鐘が鳴り響く。

1035 大声で歌ったり、小声でつぶやく

お祈りを私たちは聞きたくない。

どうせその言葉は一切理解などされず、

殆ど耐えられぬ束縛であるが、

教皇が強制して

- 1040 長い祈りを厳しく迫ったからだ。
止めてしまえ、畑の畝^{うね}ほどの
太い線で消せ。
そうすれば私が消したことを
誰でも見ることができる。
- 1045 消さなければ、役に立つ
別の仕事の邪魔になる。
菓子やケーキを焼く妨げになる。
支えとなるキリストご自身は、
この世では短かく話されたのだ。
- 1050 長い焼きソーセージには辛子^{からし}を添えるが⁽²⁾、
ああ、食前のお祈りのなんと長いこと。
お祈りで疲れたからベッドで休息。
お祈りをして座っているくらいなら、
スプーンが彫れるし、
- 1055 風呂場が暖められる。
だからお前たち、修道士や司祭たちよ、
お祈りとお喋りを止めろ。
お前たちのお祈りから魂を
取り去る、へぼ悪魔がいるに違いない。
- 1060 魂を持って天国にいるのなら、
なぜお前たちのお祈りが必要なのか。
地獄でお祈りは何の役にも立たぬ。
誰がキリスト教徒に教えたのか、
神がお前たちのお祈りを天上で聞かれていると。
- 1065 天上までは何千マイルもあり、
お前たちのわめく声をどうやって聞かれるのだ。
下界まで伸びてくるような耳を、
神が持っていると思うのか。
それ以上に大きな長い耳を持つ

- 1070 ろばは、この国にはいないだろう。
お前たちの祈りに、なぜ神は耳を傾けられるのか。
神はお前たちのことは気にしていない。
お前たちの生活がそんな風では、
神が祈りを認められても、
- 1075 お前たちがそれ以上尋ねることは許されない。
神の行為はお前たちのためではなく、
お前たちが祝福することはすべて呪われて、
晴天を望んでも、雨が降るであろう。
害を受けないように、
- 1080 お前たちの物乞いには
すべてきっぱり断ろう。
私が魂のことは諦めたならば、
私の墓に魂が来ることはない。
お前たちは墓には入れないのだから、
お前たちには金貨をやろう。

注

- (1) 聖務日課は、定時課ともいい、時代、宗派、地域などにより異同があり、また昔は日の出と日没を基準にした時刻表示だったため、季節により現在の時間とは一致しないが、定められた時刻に行う祈祷のことで、祈りの言葉を唱えたり、詩篇、讃美歌、応答歌などが歌われた。カトリックにおける、ムルナー時代の聖務日課は、Mette（朝課）、日の出直前の Prim（一時課）、Terz（三時課）、正午の Sext（六時課）、Non（九時課）、日没時の Vesper（晩課）、就寝前の Komplet（終課）で、ムルナーの原文にあるように die sieben Tagzeit 七回の聖務日課）といわれた。現在は Mette が Matutin（朝課、あるいは深夜課）と夜明け頃の Laudus（讃課、昔は朝課ともいわれた）になつて、八回の祈祷を指す。
- (2) きちんとした良い食事を取っていることを示しているが、長い祈りは必要のないことを述べている。

第十五章 五番目の同盟者

説教壇を改革するために、ドイツの関係者すべてへの警告

この賢明で敬虔な方々のところへ、

丁度良い時に来たことが私にはよく分かる。

それで、神の言葉だけを説き、

悪い教えでキリスト教徒に害を与えないよう、

1090 説教壇を改革する方法として、

以下の一寸した提案をする。

司祭たるものは悪魔のことを話してはならぬ。

また悪魔の世界を、地獄の業火だと

訴えてはならぬ。悪魔をあれこれ非難するが、

1095 悪魔は何をやったのだ。

お前たち司祭に用心するなら、

悪魔を禁止する必要はない。

敬虔な信徒である私たちは、

悪魔ともっと仲良くしよう。

1100 私たちの愚かさ、欠点のがちょう⁽¹⁾が、

鳥小屋のどこにいるかと説教などしてはならぬ。

そのがちょうは自分で見つけよう。

私たちにあれこれ知らせる必要はないし、

公然と説教壇に立って、

1105 どこで救済したか⁽²⁾を話す必要もない。

お前たちは地獄のことを沢山話し、

長年にわたり煉獄のことを訴えた、

地獄と煉獄は暑かったり寒かったり、

菌をがちがちさせるような大量の雪が降り、

1110 この地上の私たちの火が、

- その火によって消されるかもしれぬと。
しかしこのように公然と嘘をついたことが、
今は理解され始めている。
^{たわ}撫みすぎる鞭は良くない。
- 1115 しっかりとしていて手抜かりないことが、
嘘をつく特別な技なのである。
嘘をつくには特別なコツがあり、
多分別の話題にする。
しかしながら、男のことであれ、女のことであれ、
- 1120 名望ある人々がその渦中にあれば、
その嘘に苦しむに違いない。
托鉢修道会士は言ってはならぬ、
チーズを持ってこいと。
日曜日に説教壇に立って
- 1125 貧しい農民を破門してはならぬ。
破門は貧しい農民には苦しみとなるのだ。
ああ、破門がボーデン湖に沈んでくれたら。
千マイルの地底に埋まってくれるためには、
また、破門を再び持ち出す者を、
- 1130 地底の破門に釘付けにするためには、
農民は千ポンドでも出す。
説教壇の上からは何も教えてはならぬ、
喜んで聞こうとすること以外は。
どうすれば金持ちの財産や金を、
- 1135 すぐにうまく自由に分けられるかを。
地獄も悪魔も煉獄も消え去れ。
そうなれば貧しい人は喜び、
悲しみを抱いて教会にやって来ても、
喜びを持って出ていく。
- 1140 私たちが財宝を分けたなら、貧乏人も

狐の毛皮を飾りに付けたコートを着て、
大きな馬で教会に駆けつけ、
財布から金貨を取り出すだろう。

注

- (1) 一般的にがちょうは愚かな人の象徴であるが、メルカーの注によれば、ムルナーはさらに人間の欠点や愚かさも考えていたとある。ここでは当時の托鉢修道会士がキリスト教の教義や聖書の内容を説くよりは、専ら人間の欠点や愚かさがどのようなもので、どこにあるかといったことをテーマとして説教したが、それへの批判が表現されている。
- (2) 原文 wa ir es haben gelon。メルカーは、ムルナーが irs (ihr sie = Gänse) と書いたのを、印刷の際誤って es としたと推定している。これに従って訳した。

第十六章 六番目の同盟者

托鉢修道会士の説教をどのように改良し、改革すべきかということ

神が私をお前たちのところへ連れてきて下さったのは、
1145 大きな幸運だと言えよう。
というのも、私たちだけが全キリスト教徒の
共同体に役立ち、
めいめいがこの件に有用な
一項目を用意しているからだ。
1150 聖なる信仰を広めたときに
十二使徒がしたように。
さて、私は一つの非常に有害なことを知っている。
もしそれが廃止されれば、
事態はずっと良くなるだろうし、
1155 全キリスト教徒にとっての利益となろう。
今私は修道士全員のことを言っているわけではない、

- 托鉢修道会士のことだけを言っている。
連中には、説教の際に
正しい作法をよく習い、
1160 ろばが放屁するように、声を短く区切って
調整してもらいたいものだ。
妊婦たちがそこにいて、
連中があんなに大声で叫び、
力の限り声を張り上げたら、
1165 妊婦たちは恐怖に襲われることだろう。
連中は優雅に語るべきであって、
あんなに荒々しくがなり立てるべきではない。
修道院の中に
耳の聞こえない人たちを招いて、
1170 その人たちの前で、連中に思う存分
大声で叫ばせる場所があるといい。
連中はスコトゥス⁽¹⁾を引用すべきではない、
やつは森の狼ども⁽²⁾の仲間だ。
トマス・アキナス⁽³⁾とリュルス⁽⁴⁾も引用すべきでない、
1175 二人とも煙突⁽⁵⁾に吊されるべきやつらだ。
その中でやつらを^{あぶ}焙って、焼いて、
胡椒をかけてやる。
連中はもう引用などすべきでないし、
自分たちの師匠を引き合いに出して
1180 こじついたり、
キリストの福音を避けたりすべきでない。
連中が毎日物乞いをするときに、
乞食袋を持って歩き回るのは、
ただ単に袋の中に最上のチーズをもらい、
1185 白パンだけを集めるため
だったのだ。

乞食袋に雷が落ちるがいい、
あんな乞食袋なんか失せやがれ。

連中は常に、町中探しても手に入らないような
1190 極上の白パンを
もらいたがる。

物乞いを恥じないのなら、
黒いライ麦パンを食いやがれ、こんちくしょう。

連中は、とても甘い言葉で
1195 説教できるから信徒たちの人気を勝ち取っているのだ。
だから私はもう連中に説教させたくない。

連中の説教がみんなに嫌われて、
説教すれば説教壇から
突き落とされるというのなら話は別だが。

注

- (1) Duns Scotus, Joannes (1264 頃-1308) イギリスの後期スコラ哲学者、神学者。フランチェスコ会士。
- (2) ある時狼が鷺鳥たちに説教してやると言って森に招き、森の中で鷺鳥を喰ってしまった、という有名な寓話がある。
- (3) Thomas Aquinas (1225 頃-1274) イタリアのスコラ哲学者、神学者。ドミニコ会士。
- (4) Nicolaus Lyranus (de Lyra) (1270 頃-1349) 中世最大の聖書釈義学者。フランチェスコ会士。
- (5) スイスの迷信では、悪霊を煙し出すために物を煙突に吊す。

第十七章 七番目の同盟者

告別ミサ、七日ミサ、三十日ミサ、命日ミサなどの挙行のために、
一般民衆によって費やされる無駄な費用について

1200 実は私は、お前たちが私に
指定席を用意してくれたと人づてに聞いた。

それで私は仲間たちのところへやって来て、
この席についたのだ。

私は我々の問題に役立つ

1205 正当な怒りの気持ちを表すつもりだ。

それゆえに私の項目を述べよう。

ある人の死を悼むときに、

聖職者は

死者の親戚、夫や妻、子どもたちとともに会葬に加わったり、

1210 七日ミサ、三十日ミサ、命日ミサをとり行なったりすべきでない。

そういうことは以前は一般的でなかった。

そのような茶番はなんのためなのか。

そうでなくても司祭たちは、私たちキリスト教徒から
生きている間にお金を取りすぎている。

1215 死んでもなお払わなければならないというのか。

すべて取るというのなら、

連中を縛り首にしてやれ。

やつらの祈りがまったく役に立たないということは、

以前にも何度も言われた。

1220 昔のように地獄に落ちるやつなんて

今はいやしない。

地獄には穴が一つあいている、

キリストが自らあけたのだ、

その上煉獄にもな。

1225 私の斑^{まだら}の雌牛を賭けたっていいぞ。

私はミサを挙げるなんてことは

とうの昔にやめてしまった。

だから私はお前たちに、

もう悪魔とその仲間を

1230 そして地獄にあるすべてのものを

恐れる必要はない、と教えてやろうと思う。

子どもが洗礼を受けるときには、

よく注意して、慎重にせよ。

司祭に惑わされて、

1235 悪魔にけんかをふっかけ、

敵対するなどという

大それた馬鹿げたことをするな。

悪魔と反目するなんて、

あいつがお前たちにどんな苦しみを与えたというんだ。

1240 悪魔が先に絶交を通告してこない限り、

あいつをそっとしておけ。

というのも私たちは悪魔とそのような敵対関係を生ずる

いかなる権利も持っていないのだから。

カール皇帝⁽¹⁾の時代からずっと長いこと

1245 金印勅書⁽²⁾がそれを禁じている。

悪魔が仲良くしようと言っているのに、

お前たちがけんかを売ろうとするなら、

悪魔をおとなしくさせておいてもらうために、

司祭たちにお金を払わなければならないし、

1250 七日ミサ、三十日ミサ、命日ミサのために

お供えに何ペニヒも出さなければならない。

私はこれらの件をよく考えてみたが、

どうも司祭たちは悪魔と結託していて、

あいつを最良の友とみなしているようだ。

1255 だから連中はあんなに澆刺^{はつらつ}としているのだ。

それゆえ私が説明したように、

もう悪魔を拒絶するな。

そして死者のためにも、生きている者のためにも、

これ以上お金を出す必要はない。

注

- (1) Karl IV (1316-1378) 神聖ローマ帝国皇帝カール四世。
(2) Goldene Bulle 金印の押された皇帝の文書。特にカール四世の金印勅書は、七人の聖・俗諸侯を選定侯として確定し、これによってドイツ国王の選挙を行うべきことを定めた、神聖ローマ帝国の最も重要な憲法文書のうちの一つである。しかし、本文にあるような内容は書かれていない。

第十八章 八番目の同盟者

一般人にとってドイツ語による記述がいかに必要であるかということ

1260 私が一枚加わらねば

阿呆の人数もこれで全部とは申せまい。

さて、世間の人々に向かってこう言うのは誰だろう。

「お前たちは物を書くのにドイツ語か、または別の言葉を用いるのみ、なぜラテン語を用いぬのか」と。

1265 このこと、君たちによく説明してあげよう。

古き昔のドイツの習わしで

わが兄弟たちがそうしていたのだと

古い書物で私は読んだことがある。

それ故私たちはドイツ語で書く者となったのだ。

1270 みんながラテン語を学んだら、

それこそ私たちがこの国の大阿呆たることを

知る人も僅かとなり、私たちの名を知る人々も

少なくなると思うのだ。

だが私たちがもしドイツ語で本を書いたなら、

1275 印刷屋たちは商売繁盛、

彼らの財布は膨らむが、だからと言ってその事が

私どもに損を掛けるわけじゃない。

また私どももドイツ語を用いれば、

侮蔑の気持ちを一層巧みに表現できて、

1280 他の物書きどもを嘲笑う事ができるのだ。

それはあたかも誰かがカルストハンスを作り上げ、
ムルナー博士を嗤い者にしたのと同様だ。

ラテン語に訳しようも無いような

ドイツ語の語彙はたいへん多い。

1285 どうしてムルニャン⁽¹⁾などという猫の声をラテン語に移せよう。

まことに、その大いさたるや馬の瘰癧^{るいれき}、横痃^{よこね}の地腫れ、
わしらが国のワイン樽の量目にまさるほど、
小事をあげつらえば枚挙に遑のあらばこそ、
どんな作家の手にも余るだろう。

1290 汚れ^{つら}面の餓鬼だとか、路上ふさぎの売り子とか、

まった中剃り頭の禿坊主、
その他各地のドイツ語に由来する
この種の言葉は極めて多く、
とてもじゃないがラテン語になんぞ移し得ぬ。

1295 そこでこれらを用いたドイツ語で、

新教徒達のために良かれとて
出版した私どもの書物をば、
どんな田舎娘でも一冊は
手に入れられるようにと配慮した。

1300 また同様にかの新教徒達が、

十二使徒の名を唱え得るよう私どもから学びとればと乞い願い、
かつ又、何故に私たちがあの争論口舌の連中を
キリスト教徒の新らたな一派と位置づけたかを、
行き付けの飲み屋で酒をかたへに置いてでもよし、

1305 よく考えて欲しいと思ったのだ。

私たちはまた自分たちの信念で、
この仕事をフランス人に任せようとは思わなかった。
ラテン語で書かれていたならば、彼らが理解するだろう。
この書物がドイツに留まるようにとの思いから

- 1310 私はこれをドイツ語で書いたのだ。
もし豚の餌箱に書かれていたならば、
豚の手元に留まっていたらろう。
かくて阿呆どもの習いなる軋轢やら反目も
永きに亘り持ち越されることなど
1315 絶えて無くなることだろう。

注

- (1) 原文は Murnauw。先のカルストハンスでムルナーはまずムルニャンと猫の鳴声をたてながら登場する。

第十九章⁽¹⁾ 九番目の同盟者

反キリスト教^{どうきょう}的な同行の人々から解放されたいというすべての
宗教心篤き修道士および修道女の切なる願い

- 哀れな子らや真っ当な人々の為に
救いの手を差し伸べてやるようにと
修道士や修道女たちが私を遣わし、
かくして私はこの立場に置かれている。
1320 ともあれあの人々は私どもと血肉を分けた兄弟だ。
それゆえあの人々が楽しく居られるよう、
当然のこと私たちは彼らに救いの手を差し伸べる。
ご覧のとおりあの人々はまさに飢え死しそうだし、
長期にわたる節食で、体は衰弱しきっている、
1325 家にほとんどパンを貯えていないけれど、
ヴァンゲン村の住人に眼を抉りとられんばかりだし⁽²⁾、
肋骨がすべて数えられるほどという点では
屠殺される豚も同然だ。
哀れな人々よ、あの人々を思うと心が痛む。

- 1330 身に纏う物とて無く、
 肌身も露^{あら}わなその貧しさは
 殊の外にひどいものだ。
 十枚ものマントに身を包み
 大地にかれらを押し潰すかと思うほどの
- 1335 布で身を飾る以外には、
 何も持ちあわせていないのだ。
 その困窮を哀れんで
 ぜひ、あの自称貧乏人どもを助けてやって欲しい。
 あなたがたの車からあなたがたの住まいへの
- 1340 あの連中の衣裳運びを助^すけてくれ、
 そして連中が何を言おうと気にしなさんな。
 あの連中の修道服はなんと大きな悩みと悲しみを
 背負っていることだろう。
 男どもは女房を持てたらいいと思うているが、
- 1345 その点、尼僧たちは好い体だ。
 歓びを放棄せざるを得ぬような何を
 あの連中はともどもこぞってしでかしたのか、
 この世の者はみなその一事から生まれて来たものを。
 されば私はかれらを呼び集め、
- 1350 修道士はすべて女房を持つように、
 そして尼僧は亭主を持つようにと呼び掛けた。
 こと成就の暁には、結婚式に出かけてからに、
 持てる物は奉獻、奉納しようと思うている。
 あの連中もまた好んであい集い、
- 1355 他のキリスト者たちが集まって
 酒汲みかわすその部屋の、
 私どもの許へと喜び勇んでやって来る。
 まるで柵をめぐらされた豚同様に、
 なぜ彼らは修道院に起き臥しせねばならぬのか、

1360 神よ、この愚かしさを止めさせ給え。

あの人々はむしろ踊りに繰り出して、
輪になり踊る私どもに加わって飛び跳ねたり、
洒落た唄を唄ったり、
きれいに伸ばした白い薄布を翻し、

1365 聖アルボガスト⁽³⁾の許に行くが良い。

あの連中の悦びは、私たちの悦びだ。

あの女たちから尼僧の衣服を剥ぎ取って、
その内側を覗き見よ。

もしあの連中が美しくば、修道院の外に居らしめよう。

1370 尼僧院へ入れるのは婆どもでたくさんだ。

注

- (1) 全編にムルナーの皮肉な観察眼が光っている。貧しく清廉な修道士・修道女を救う為に遣わされたはずのムルナーがじつは酷しくかれらを批判する立場にある者という設定は、これまでも多くの場面で見られたことである。
- (2) ヴェンゲン村の最も貧しい修道士が村人から眼を剝り抜かれるという表現にはムルナー流のきわめて酷しい皮肉が込められている。村の住人達が修道士たちに反感を覚えているのも、そもそもその始めは、修道士たちの強欲に端を発しているのであって、貧しい村人たちからさまざまな名目で献金やら物納を強要し、己れは豊かな生活を営みつつあるという実情を踏まえてこの章句を読まねばなるまい。従って、最も豊かな修道士は言はずもがな、最も貧しい修道士からでも、その眼を剝り抜いてやりたく思うほどに、憎しみが昂じているという状況なのである。屠殺寸前の豚の肋骨が数えられるほどという表現も実際には有り得ぬことで、そんなに痩せた豚が屠殺寸前であるなど考えられない。もちろん、丸々と太っている豚であるに相違ないのである。すべてに皮肉な思いが込められているこれらの表現はムルナー一流のものと言って良いと思われる。
- (3) シュトラースブルク近傍の修道院。シュトラースブルクの19代目の司教の名前に因んで付けられた。アルボガストはのち聖人に列聖された。この近傍は遊山の地として著名であった。しかしまた同時に悪所としても知られていた。

第二十章 十番目の同盟者

プシタクス⁽¹⁾が幸せの国⁽²⁾からもたらした新しい規定,
聖職者階級の改革

おお、リュートを手にした歌姫たちよ。

私はお前たちに新しい規定のすべてを示すぞ。

喜べ、お前たち、敬虔な新しいキリスト教徒たちよ。

私がここですばらしい日々を送っていると、

1375 お前たち全員が知れば、

ようこそ、と私に言うであろう。

私は聖職者改革を行うつもりだ。

皆に新しい生き方をさせるためだ。

特に教会では、

1380 司祭たちがやってきたように、

誰も祈ったり、歌ったりしてはいけない。

我々はそんなことすべてを止めて、

手斧やまさかりに柄を取り付けるといような、

もっとよいことを行うつもりだ。

1385 だからお願いする、私の言うことをもっとわかってほしい。

キリスト教は我々に平和を与えている。

我々はそれを拒否せず、

心と両手で受け取り、

大砲をすべて回収し、

1390 溶かし、鐘に作り替え、

それを教会の屋根の下に

ぐるりと吊し、

強く音を響かせるのだ。

こうして我々は屋根の下で鐘を鳴らしたい、

- 1395 我々の腰が砕けてしまうほどに。
最良の鐘の音を響かせ、
鐘の響きに核心を見つけた者が、
最高のキリスト教徒だ。
我々阿呆はもともと鐘を鳴らすのが好きだ。
- 1400 教会へ詣でる者は、
自分の鈴を持っていくのがよい。
かつてアロン⁽³⁾が持っていたのと同じぐらい
たくさんの鈴を司祭が身に付けるのに倣って、
我々も鈴を持ちたい。
- 1405 司祭が祭壇に進むや、
女も男も、
強く鐘の紐を引き、
敬虔な気持ちで心の底から
二時間半の間鳴らすがいい。
- 1410 一番長く鳴らす者が、
聖職者の地位に就くべきだ。
いつ何時たりとも鐘と
鈴が足りなくなないように、
貴族どもに厳しく要請すべきである。
- 1415 奴らがこれからずっと気をつけることは、
鷹に鈴を付けず、
鈴をすべて教会に供出し、
そりを引く時に馬に付いている
大小の鈴も供出するのだ。
- 1420 死ぬ前に、
遺言で教会に
鈴を鳴らすべく寄贈する人のためには、
十二時間鐘を鳴らすのがよい、
この者が鐘の音できちんと埋葬されるために。

注

- (1) Psitacus。この仮名でエーバリーンは、彼の従兄弟のフルトリヒ・ジティックのことを言っている。
- (2) Wolfaria。エーバリーンが初めて描いた最初のユートピア。
- (3) モーゼの兄とされている大祭司。出エジプト記 39, 25-26 参照。

第二十一章 十一番目の同盟者

プシタク스가幸せの国で書き示した、世俗階級の新しい秩序

1425 なぜ我々はお上、

教皇、皇帝に従わねばならないのか。

我々が勢力を拡大し、

聖職者階級をすっかり改革し、

教令集⁽¹⁾を焼却したので、

1430 今度は世俗階級をも

改革し、秩序の構築しよう。

新体制には皇帝を必要としない。

皇帝は要らないと我々が思っていることを、

誰にも気取られてはいけない。

1435 我々が皇帝を廃そうとすると、

公的な抵抗に出会う。

皇帝の支配と権力は大きすぎるからだ。

皇帝は、阿呆が二十人かかっても

持ち上げることのできない棍棒を我々にかざした。

1440 それゆえ皇帝の悪口はひかえるのがよい。

しかし秘かに我々の間に根をおろしている

新しい規約を記してみたい。

それに従って世俗階級全体が

動き、司られるべきだ。

1445 教皇、枢機卿のすべて、

司祭、修道士どもを

我々はすべて追い払って、

奴らの命令を無視するのだ。

奴らなんか糞くらえだ。

1450 各小教区及び中教区には

一人の司祭がおればよい。

全員で一人の司祭を選ぶのだ。

一番気にいった者を

司祭にすればよい。

1455 その見返りに司祭によい女房をあてがい、

腹一杯になるまで、

聖職録と年貢を与えよ。

そのうえ助任司祭を付けてやれ、

司祭が病気になった時に、

1460 助任司祭は女房どものために

お勤めをするのだ。

何故なら女房どもはお勤めをしてもらいたがるが、

司祭たる者がいなくてはたちゆかないから。

一つの村に一人の司祭が付くように、

1465 一つの村で種牛一頭を飼うのがよい。

牛飼いが雌牛を扱うように、

助任司祭は女を扱うがよい。

もし村の外の女たちが、

助任司祭を求めれば、

1470 助任司祭は種付け料をもらい、

女たちから文句が起きないように、

職務をきちんと果たす

義務がある。

お前たちは司祭であるが、猿でもあることを

1475 神自らが定められた。
 お前たちはそのような特権を
 洗礼の時に神から授かったのだ。
 司祭がその立場でおこなう如く、
 雌牛の群れが一頭の種牛を持つように、
 1480 お前たちの女房に乗っかる
 立派な間男を選べ⁽²⁾。
 そのことに誰も口をはさんではいけない。

注

- (1) 教会規律、教会法の諸問題につき教皇が発した教令の集録。
- (2) 1480 行の「女房」の原語は schwein「雌豚」。1481 行の「間男」の原語は eber「雄豚」。これはエーバリーン (Eberlin) をもじっている。

第二十二章 十二番目の同盟者

修道士たちの切なる訴えに対する、
 ドイツのあらゆる敬虔な人々の好意ある回答
 私こと十二番目の同腹の仲間は
 修道士からも修道女からも悲痛な叫びが上がっていることが
 1485 よくわかった。
 この哀れな人たちは屈辱的な扱いを受け、
 浮かれ騒いだり、
 はめを外すことが許されない。
 このか弱き人たちは
 1490 たくさんのさまざまな規則で厳しく扱われようとしている。
 それゆえ私たちはこの大変な嘆きに対して
 やさしい慰めの言葉を返してやろう。
 修道士と修道女たちは修道院を出ればいいのか。

これ进行思いとどまってはならない。

1495 女であれ男であれ

修道院を抜きたいという人には、
いつもパンの籠とワインの樽を
しっかり持たせてやれ。

次のような規則が作られた。

1500 領国や村や町で

修道士と修道女が修道院を抜け出して、
市民の家にやってきましたら、
市民は自分の家を出て、
修道士と修道女に住ませるべしと。

1505 その人たちは自分の生活を捨ててきたのだから、

市長や役所は
修道士や修道女たちにマルヴァシアワインやラインファルワインを
ふるまう用意をし、
そして揚げパンを作り、楽しい一席を
1510 もうけてやるべしと。

というのも修道士や修道女はみな死んで、
そこから生き返り、
死から生へと飛び移り、
阿呆帽を手に入れようとしたからである。

1515 それゆえみんな修道士や修道女にはお金を与えるべし。

かの者たちは長い死ののちに再び
死者たちのところからこの世へやってきたのだから。
ああ、あなたがた敬虔な人たち、よくぞ来てくれた。
あなたがたが苦痛から解放されたこと、

1520 私たちは心よりうれしく思う。

あなたがたは今や浮世の幻想をたっぷり味わうことができ、
落ち着いて自分のことは自分で
決めることができ、正々堂々と

グレートリン、カテリン、エルザ⁽¹⁾と結婚できる。

1525 こんなことは修道院ではやらせてもらえなかった。

以前はそうしたことは、グレートリンを盗むかのように、

人目を忍んで行なったものだ。

今や靴の中の藁やそうしたものは

いっさい隠してはならない⁽²⁾。

1530 あなたがたは今では修道服も着ず、修道院の人間でもない

在俗司祭だから、

他の在俗司祭たちが女たちとともに

楽しく暮らしているように、

一人の女を家に置き、

1535 楽しい生活をするようにせよ。

ただし用心せよ、

疥癬持ちの女を連れ込まないように。

そうした女たちは私は心の底から嫌いだ。

注

(1) いずれも娼婦の名としてよく使われる。

(2) 「靴の中の藁」は隠せない、公然のものであることのたとえ。

第二十三章 十三番目の同盟者

ポルトガル王が初めて発見した新しいキリスト教徒たち、

この人たちを守る手助けをしてくれるスイス人への期待と警告

この席につけと言われれば、

1540 私から冗談が消えていく。

スイス人をからかっても

何にもならないような気がする。

だからスイス人に懇願して

- 阿呆になる手助けをしてもらうよりは、
1545 スイス人は神におまかせして
ここでは触れないでおきたい。
私は期待している、愛すべき誠実な人たちなら、
教皇や聖職者や秘蹟、
そして私たちキリスト教徒が所有しているものすべてが
1550 どこに由来するかをよく知っているであろうと。
これらによって私たちは大いにののしられている阿呆として、
徹底して祓われるべきだなどと言われているが。
それゆえ私は誠実な人々に
私たち阿呆の仲間になってほしいとは思わない。
1555 しかし私の父親は
スイスの二人の誠実な男を知っている。
ああ、その人たちがまだこの世に生きていたら！
その二人なら私たちの助けになれたであろうに。
そうそう、一人は聖界に仕え、
1560 もう一人は世俗に仕えたであろう。
一人はグライフ博士で、
もう一人は騎士ペーターだ。
かの博士は阿呆船に乗っている人をだれかれとなく
手で触り、
1565 脈をとって言うことができた、
阿呆がどのくらい長い時間耳を持つことができるか、
またこの世でどのくらい長い時間阿呆の棍棒を持つことができるかを。
こうしたことに関して博士のわざは完璧だ。
ああ、あの学識ある人が生きていたら、
1570 その教えを含んだ説教や、
新しいキリスト教徒に関する思想でもって
大いに私たちの助けになってくれたであろうに。
同じく自由身分の騎士ペーターも

ルター主義にはまことにうってつけだ。

1575 というのもペーターは騎士にふさわしく、

剣でもって主張してくれたから。

ペーターは騎士としての名誉を持っているから、

剣をすぐ抜いたらお陀仏だ。

ああ、ペーターが今このときまだ生きていてくれたら！

1580 私たちのこの同盟にふさわしい人なのだが。

あの世でペーターに神の恵みがありますように。

もう一人私は知っているが、

スイスの人ではない。

その人も私たちを助けてくれたであろうに。

1585 ウリー・フォン・シュタウフェンという名である。

よく聞いてくれ、その人は醜くて

とてもやせていたが、

しかしはつらつとして、おまけに健康であった。

その人ならこの同盟が滅びないように、

1590 いつも大いに私たちを助けてくれるであろうに。

ハンス・ヴェルンヘア・フォン・アネルスベルクにはさらに子供がいる。

同じくウリーというがまだ小さい。

この男もこの世にいれば役に立つであろうが、

この勇敢な男はチーズを食べない(=生きていない)。

第二十四章 十四番目の同盟者

現在我々が聖人に行っている馬鹿馬鹿しいお勤めの告発

1595 さて私は聖人について、

聖人の生前の生き様^{さま}について述べてみたい⁽¹⁾。

我々は何をもって聖人を崇め^{あが}ねばならぬのか、

そのことをキリスト教徒の皆に教えたい。

- もし聖人が銅造り⁽²⁾だとわかったら、
1600 崇める必要はない。
私の場合次の原則は外れたことがない。
銅銭払いのミサは銅銭だけの値打ち⁽³⁾。
しかし聖人が木彫りなら潔く崇め^{いさぎよ}ましょう。
もしその木彫りの聖人が山程^{ほど}あれば、
1605 私はそれらを薪^{まき}として頂戴するが、
石造りの聖人は放っておくだろう。
我々キリスト教徒を苦しめている聖人は多い。
どの聖人のためにももう断食してはならぬ。
聖人が聖人であり得るために、
1610 我々はその祝日にワインを飲むなどと言われ、
まるで牧羊犬の扱いで、
口からパンがひたたくられねばならぬのか。
私が聖マルチン⁽⁴⁾を褒め^ほ称^{たた}えるのは、
その祝日にワインに加えて太った鷺^が鳥が食べられるからだ。
1615 この点で役立たずな
聖人たちはどうしようもない、
例えばアーバリーン⁽⁵⁾が断食中にやって来たとき、
奴は我々の貯金箱を満たしたが、
腹^{から}を空にし、
1620 胃袋もすっからかんにした。
聖人の祝日のいくつかは
具合の悪い時期に設定されていると思う、
特に冬に設定された聖人の祝日は。
そこで夏に変更された祝日もある、
1625 厳寒期に震えながら
苦行をしなくてもいいように。
困ったときに必要な
救難聖人⁽⁶⁾は大事にしたい。

- 私が言っているのは金銀でつくられ
1630 教会におかれている聖人のことだ。
その聖人は、特に貨幣にすれば、
我々キリスト教徒に大変役に立つ。
その聖人を我々皆が必要とするのは
祭壇の上よりも財布の中だ。
1635 そういった聖人は、幸福が不幸に変わりそうなとき、
大いに有り難がられるのは当然で、
金貨銀貨に不足しないよう、
手を出すことになる。
もし聖ヴェンデル⁽⁷⁾がしかるべく
1640 子羊すべてをしっかりと見張ってくれるなら、
我々はこの聖人を褒め称えるべきだ。
豚飼いを雇わなくてもいいように、
聖アントニウス⁽⁸⁾が豚の世話をしてくれて、
豚が丸々と太り、
1645 しかもふすまをやらなくても、小屋の中で育てるより
ずっと立派に肥えるといい。
我々に慈悲深くあらせられる聖人様方、
その方々とは仲良くする。
しかし我々が得をすることのない聖人様方、
1650 そんな方々には敬意を払わないでおく。

注

- (1) 原文はこの通りであるが、以下で「聖人の生前の生き様」を述べてはいない。
(2) 「偽の、無能な」の意。原語 kupfern「銅製の」は 1602 行の諺と関連して掛詞になっている。
(3) 「少ないお布施には功德が薄い」の意、言外に「いい加減な聖人の祝日にあげられるミサなんて効果なしだ」の意を含ませている。
(4) St. Martin (316-397) ローマ帝国時代のトゥールの司教。キリスト教の布教、修道院の創設に尽力。その祝日は 11 月 11 日で、新しいワインの試飲日で

- もある。ここでは断食を廃止した同名のマルチン・ルターを暗示しているかも。
- (5) Aberlin いかなる人物か不明。そのため次の三行も意味不明。
- (6) 困窮の際、とりなしの功德を持つとされる14人の聖人。十五世紀の中頃に特に盛んに崇拜された。例えば聖クリストフォルスは旅人を厄災から守るとされた。以下で言及される守護聖人とは別。
- (7) St. Wendelin (ca.554-ca.617) アイルランド出身で、トリーア近郊に住む。家畜や農地の守護聖人で、そのシンボルは羊と牧人が肩から下げている袋。祝日は10月22日。
- (8) St. Anthonius (ca.251-356) <修道生活の父>と呼ばれるエジプトの隠修士。修行中厳しい誘惑に耐えたという伝説は「聖アントニウスの誘惑」として絵画の格好の主題となっている。また家畜の守護聖人でもあり、豚はそのシンボルの一つである。祝日は1月17日。

第二十五章 十五番目の同盟者

キリストを信じるすべての人々が新しい有害な教えから
身を守れという有益な警告

新しい教えが沢山

町や村で興^{おこ}っている、

そこで私はお前たちのところへやって来た、

信仰厚き者すべてに警鐘を鳴らし、

1655 かかる教えに気を付けるよう

厳しく命じるためだ。

まず騙^{だま}されてはならぬ、

ある人がびっこを引き引き歩いているのに、

その人が全く普通どおりに、

1660 すたすた歩いているとか、

また、古いチョッキが

新しいのと同様よく似合うとか、

山羊の雄にはひげがないとかの言葉に。

それは本当の姿に反する。

- 1665 ねずみのいない古い納屋、
しらみがない男の子とかの言葉も同じだ。
お前たち、騙されてこうしたことを
決して信じるな。
もし誰かがかかる教えを口にして、
1670 外に金の驢馬^{ろば}がいるぞ⁽¹⁾、
町へ連れて行かれるところだぞ、
断じてそれに手を貸してはならぬ。
お前たちしかるべく用心して、
黄金に心を動かされるな。
1675 そんなことはあり得ない、いいか、
驢馬が本当に金ならば、
ゆうゆうと町を歩かされるなんてことは。
こうした教えには気を付けろ。
お前たちはいい加減な風評に動かされてはならぬ。
1680 お前たちを阿呆にしようとする奴がいても、
その言葉を信用しないよう、
くれぐれも用心せよ。
こうした言葉を信じる奴は、
確かにどうしようもない阿呆だ。
1685 福音書から少しも離れることなく、
そこに書いてあることだけを信じよ。
聖書のなかで福音書の教え以外は、
何も記憶にとどめるな。
福音書に書いてないことは、
1690 ^{いっさいがっさい}一切合切信用できぬ。
私はお前たちに切に切に警告する、
書類に判が押してあるからといって信用するな、
商人の帳簿に記載されてることは、
どれもこれも嘘っぱちだ。

1695 こんなものはすべて悪魔に食われろ、だ。

福音主義者が書いている

賞賛すべき聖書だけが

信じるに足るとせよ、

ただし我々が重罪を引き起こすような

1700 ところだけでだ。

福音書にも不十分なところが沢山あって、

扇動的でなく、

教会や修道院を破壊するのに役立たないなら、

福音書に書いてないこともやって、我々福音主義者を超えるべきだ。

1705 お前たちが心すべきことはただ

新しいキリスト教徒が教えていることだけだ。

我々はやがてぐんぐん数を殖やすだろう。

我らが教祖は車八千台の先頭に立ち、

我が世の春を謳歌することになる。

注

- (1) 1670-77行はある逸話に拠っているらしいが、不詳。

第二十六章⁽¹⁾ 同志ファイトや傭兵全員がルター派同盟に手を貸すわけではない理由

1710 今ドイツの国に起こっている

戦いのうわさを聞けば、

貧しく血気盛んな俺は

フランスからポンテロワー⁽²⁾でも

ロンスヴァル⁽³⁾でもパンー切れもって馳せ参じる。

1715 つまりルター野郎が宣言したことは、

味方を招集し

大騒動を引き起こし、

- 槍や棒を持てる者は
防衛のため
- 1720 大砲を持って、全軍で駆けつけよとのことだった。
こんなことをフランスで耳にしたので、
俺は大急ぎで
わが祖国を救いに参じた。
ところが坊主⁽⁴⁾の口先だけ。
- 1725 坊主ときたら俺たちみんな招集しておいて
旗揚げを鮮明にせず、
俺が進んで陣へ行こうとすれば、
けちな坊主ときたらまるで給金をよこさん。
馳せ参じたのは無駄骨だ。
- 1730 こん畜生、奴と
俺を呼びによこした奴らすべてを破滅させてやりたい。
くそったれ、俺に全てが分かり
坊主同盟が分かったからには、
坊主ら名乗らないことを
- 1735 恥じねばならいぞ。
こっそりやらかすのは
真っ当で勇敢なことじゃない。
畜生、くそったれ、
同盟をつくろうとし、
- 1740 そのためにこんなにも多くの兵を集めておきながら、
名乗り出ようとしない一人の奴は
悪魔の手で破滅してもらいたい。
俺がヴォルムスで作られた
ある文書⁽⁵⁾で読んだとき、
- 1745 誰が悪者で
皇帝に刃向かい、
神聖ローマ帝国全体に刃向かい、

同様全都市に刃向かっているか知らない者がいようか。

俺が帝国を敵にまわすつもりなら、

1750 もっとたんまり給金がほしい。

悪党となり

俺が生まれた帝国に敵対し

戦争を始めるなんて、

まっぴらご免だ。

1755 こん畜生、くそったれ、待ってろ。

やっと治め始めたばかりなのに、

それには敵の多い

有能な若者⁽⁶⁾を

悪者どもが騒乱で困らせるなんて、

1760 悪者どもは後悔するがよい。

実際トルコの危機⁽⁷⁾が

俺たちの戸口に迫っている。

こん畜生、戦いになってくれ、

悪者が戦争でくたばるのを俺は見たいものだ。

1765 給金なくとも悪者に復讐し、

悪党たちを皆殺しにする手助けをしたい。

悪党たちには力も権力もなく

ぶらぶら歩き回ってくだらないことをするだけだ。

連中に手を貸すことは誉れにならず、

1770 馬鹿と思われるだけだ。

坊主や尼さんは結婚し、

もう修道院に残るな、とか、

百姓たちは箱の上で

雌鳥を抱いて断食せよ⁽⁸⁾、とか、

1775 坊主たちがミサを挙げ、

托鉢坊主たちはもうチーズをもらいに来るな、など、

俺たち傭兵の知ったことじゃない。

- どの百姓娘だってもてるように
ドイツ語の冊子をも写せ、とか、
1780 鐘を鳴らして、
定刻に司祭を席に着かせろ、とか、
俺たちはもうお願いする必要はないし、
困っても名を呼ばなくてすむように
聖人たちを教会から放り出せ、とか、
1785 真っ当で勇敢な男はそんなことはしないのだ、なんて。
俺は聖人なしではすまされない。
マリア⁽⁹⁾や聖ゲオルギウス⁽¹⁰⁾
聖ヤコブ⁽¹¹⁾もだ、
俺がひどくまずいことになりそうなら
1790 ほかの者がどうしようと、俺が困ったときには、
なんとしても聖人を呼びだす。
だから聖人たちを見限るなんてことはできやしない。
まだまだ他にも聖人たちはいる、
俺は聖人にかけて悪態をつくので、こんな聖人が必要だ；
1795 聖フェルティン⁽¹²⁾と聖キュリン⁽¹³⁾両者ともだ。
痛みのちがう舞踏病の聖ファイト⁽¹⁴⁾さ。
聖フプレヒト⁽¹⁵⁾とコルネリウス⁽¹⁶⁾
丹毒の聖テンク⁽¹⁷⁾。
畜生またもこんなで、
1800 俺は聖人なしではやめられない。
こん畜生、お前が聖人を禁じたら
俺は何にかけて悪態をつけばよいのか。
まずいことになれば、俺は聖人なしでは
暮らしちゃあ行けん。
1805 腹が立ったら悪態をついてやる、
コッヘルスベルク⁽¹⁸⁾で悪態づいているように、
くそ馬鹿、くそ阿呆、くそたれ、くそ食らえ。

次の言葉で締めくくろう。

- 名乗りたくない奴みんな、
 1810 坊主の側につく奴みんな
 こん畜生と辱しめてもらいたい。
 坊主は金払いがひどく悪いから、
 奴ら熱病にかかって
 がたがた震えればよいのだ。
 1815 なんて万事悪しからず。

注

- (1) この章で、「俺」はファイトという名の傭兵。
- (2) 原文では ponterower, メルカーによれば何処の地名か不明。バルケはローマ人に作られたスペインのガリシア (Galizien) 地方の港町ポンテヴェルダ (Ponte verda) であろうと推測している。
- (3) 原文では runtze fal は有名なピレーネー山脈中の溪谷名, フランス古代叙事詩《ローランの歌》のローランは 778 年この地で戦死したということになっている。またカスチリアの反乱に対するカール 5 世による鎮圧には実際ランツクネヒトたちが加わっていた。
- (4) ルターのこと。
- (5) ウォルムスの帝国議会によって起草された 1521 年 5 月 8 日付けの勅令。ルターに国外追放を課した。
- (6) カール 5 世のこと。1516 年, わずか 16 歳でスペインの王位を継ぐ。1519 年には, 皇帝選挙で対立候補のフランス王フランソワ 1 世を破って皇帝に選ばれた。
- (7) オスマン帝国のヨーロッパ進攻のこと。1529 年にはウィーンが包囲攻撃された。
- (8) 百姓たちの断食の掟の守り方。雌鳥を抱え, 卵を孵す形を模倣し, 鶏が産んだ卵は頂戴する。
- (9) 原文では Mariam: 聖母マリアのこと。特に托鉢修道会がマリア信仰を作り出した。
- (10) 原文では sant Jøerg: 聖ゲオルギウスのこと。3~4 世紀ごろのカップパドキア出身の伝説的聖人。ローマ帝国の軍人で, 偶像崇拜を拒否したため, さまざまな拷問の末, 殉教。後世, ゲオルギウスが馬で旅行中, 悪竜を退治し, 犠牲に選ばれた王女を救ったという伝説が加わり有名になった。
- (11) 原文では sant Jacob: 使徒聖大ヤコブのことで, コンポステラに墓があっ

たことからこの地にドイツからしばしば巡礼が行われた。

- (12) 原文では *sant veltin* : 聖ヴァレンティンのこと。特にもの憑きやてんかんの守護聖人。
- (13) 原文では *sant kûrin* : この聖人は人々を疫病から守ったということで、疫病や災難を防いでくれる守護聖人。
- (14) 原文では *veit* は *Valentin* の縮小形でもありとともに、*St. Vutus* (‐306 年) のドイツ語形。舞踏病患者の守護聖人。
- (15) 原文では *sant huprecht* : ベルギーのリエージュ、初代の司教 (728 年没)。後世の伝説では公爵の息子で、祝祭日の狩の折、十字架をつけた鹿に出会い改悛。10 世紀には狩人の守護聖人。
- (16) 原文では *cornelius* : ローマの司教で、252 年に殉教し聖人とされた。
- (17) 原文では *sant deng* : パドヴァの聖アントニウスのこと。豚の守護聖人。
- (18) フランスのアルザス、シュトラースブールの西方の肥沃な地域。この地の住民はその昔、素朴で荒削りの習慣と古風な身なり、野卑な言葉使いで諺にもなるほど有名であった。

(受理日 平成 18 年 1 月 18 日)